

# 音楽と私

千葉シニアアンサンブル 川野正彦

母親が音楽好きであったためでしょう。物心がつく前から母親の口真似で歌を歌っていたようです。本人は記憶しておりませんが、3歳のころグリークの「ソルベグの歌」を母親に言わせれば、可なり正確な音程で歌っていたとのこと。長じて何かの機会に歌詞の一節、～君が帰りをただ我は、ただ我は、誓いしままに待ち侘ぶる、待ち侘る… がすらすらと出てきたので何とも不思議な思いをしたことを覚えております。父親が早死にしたため、我が家はずっと母子家庭でした。終戦直後のことでもあり、生活は楽ではなかったようですが、そんな中、母親が娘時代に使っていた39鍵の足踏みオルガンを実家から持ってきてバイエルの手ほどきを受けたことが、物心がついて以降、西洋音楽に触れた端緒でした。父親が10人兄弟で係累が多く、終戦後の一時期に同じ場所に住み暮らしておりましたが、特に女性陣が寄ると触ると合唱が始まるような歌好き集団でありましたので、「希望の囁き」「夜来香」「リンゴの歌」「アロハオエ」等の旋律が常に流れているような環境でした。



中学校に入学して大きな転機が訪れます。音楽の教諭から勧められて吹奏楽部に入りましたが、指導者が当時の吹奏楽の重鎮であった、萩原庸貞先生でありました。歯並びをみてクラリネット担当を割り当てられたのであります。1955年のことです。爾来、60年の長きにわたり、社会人であった数十年のブランクは有りましたが、クラリネットを吹き続けてきたわけですし、あのとき他の楽器を割り当てられていたら、私の音楽生活も、かなり違った形になっていたのではないかと思います。

中学3年になったとき、朝日新聞社が主宰する「朝日ジュニアオーケストラ」に萩原先生の推薦で参加することになります。しかし、待っていたのは、弦楽器をはじめとする多くの参加メンバーと、己の技量の差の巨大さに打ちのめされる現実でした。当然です。当方は好きでなんとなくやってきただけであるのに対し、他のメンバー、特に弦部門の多くは、幼い頃から厳しい個人指導で鍛え上げられた面々であったのですから。専門教育の必要性を痛感した私は、オケの指導者の紹介で、当時東京フィルのクラリネット奏者であった、松本先生に師事することになります。茲で初めて音楽を作り上げるために必要な要素である、音色、テクニックに系統的に接することになりました。当初は夢中になって練習を重ねます。大半はロングトーンとスケールに終始する毎日の練習でした。現在千葉シニアで手掛ける曲を技術的にはあまり苦勞せずにこなせる事実は当時の練習の賜物であると感じています。練習が進むにつれて、さらに大きな壁に遭遇します。登っても、登っても更なる高みが遙か彼方に見え、最高峰は全く見えてこない。別の言い方をすれば深みにはまってもがけども、もがけども底が見えない。このような壁でありました。練習は相変わらず単調なロングトーンとスケールです。3年間レッスンに通いましたが、大学受験のことも有り、とうとうやめてしまいました。

その後約50年を経て現在に至ります。千葉シニアで音楽活動を続ける中、時折「自分にとって、音楽って何なんだろう」と自問します。基本は「音を紡いでみんなで作品を作り上げること」と自答するのが常ですが、最近では、音を媒介にして、みんなのハーモニーを練り上げてゆくことが究極の目標かななどと思いはじめています。

